

キリストの光 光のキリスト

年間第13主日 7月1日

(ルカ9・51—62)

牛に鋤を引かせて畑を耕すところは、もう日本にはほとんどないのかもしれない。幼少のころはまだ、牛馬を見ていた。その匂いや鋤を触った感触はまだ残っている。鋤いた跡がまっすぐになっっているのを見て、実にうまいもんだと感心した覚えもある。「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」とイエスは言う。後ろを見ながら鋤で耕すと、耕した跡がかえってゆがんでしまう。まっすぐ、前に視点を定めて鋤くことが秘訣なのだろう。

聖堂に隣接する幼稚園のホールに聖母子の油絵が掛けられた(二面に掲載)。百六十センチ四方の大きな絵。宇宙を背景に、聖母マリアと生ま

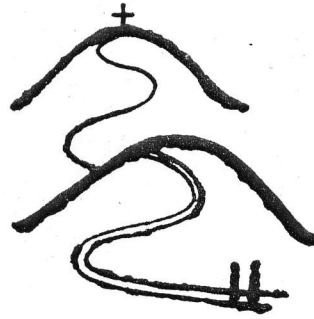
まっすぐ見る

れたばかりの幼子イエスが描かれている。神の手とも思える大きな手で包まれた幼子を見ていると、昔、母の手に抱かれて味わった安心した平和な気持ちがいまがえってくるようだ。

一人の5歳になる園児が絵の前にじっと立って見入っていた。後ろからそっと近づいて、しゃがんで、静かに手をまわし、その子を軽く包み込んだ。しばらくの間、黙って一緒にその絵を見た。「何が見える」と聞くと、その子は「神様…」とぼつんと答えた。「こわいの？」と聞くと「ううん。うれしい」と答えた。

この男の子は入園当初から動きが激しく、いつもきつい表情をしていた。気にかかってきた子である。聖母子

の絵を見た後、この子は変わった。表情は豊かになり、うれしい顔をしている。動きにも自信が見える。この絵を見て、自分の命の出所を直感したのだろう。自分は神から望まれて生まれてきた、と。そして、神に包まれて生



かされている、と。同じ絵を見て、飛び跳ねながら「ぼく、生まれてきてよかったあ」と言った子もいた。

過去は過ぎ去った。わたしたちにあるのは今とそして未来。前を見つめて生きる人は神の国にふさわしい者となっ

ていく。どんなに苦難の道を歩んできたとしても、どんなに罪にさいなまれてきたとしても、その道の先に神を見つめることができれば、過ぎた道跡はまっすぐなものとなっている。

視点を定めて歩くこと。そうすれば、これからの道もまっすぐなものとなる。

イエスはエルサレムに向かっている。それは受難と死の場所。イエスは決意を固め、そこを目指して進む。わたしたちの人生も前途多難。さまざまな苦しみもあるだろう。

そして迎えるのは死。しかし人生はそれで終わりではない。その先に復活があることをイエスは証ししてくださった。だから、わたしたちも苦しみと死が最後ではなく、復

活が最後であることを見つめて歩く。そこには完成された神の国がある。わたしたちは、そこに戻る。

美しく彩られたこの聖母子の絵。聖母マリアの目だけが灰色に塗られている。それは、生まれたばかりの幼子のは、人生の終局、死と受難、そして復活を見つめる色である。聖母マリアの目は父なる神の目でもあり、その目はわたしたちをも慈しみ深く見つめている。

(山元眞一福岡教区司祭／カット＝高崎紀子)

今週の福音

2日・月	マタイ	8・18	22
3日・火	ヨハネ	20・24	29
4日・水	マタイ	8・28	34
5日・木	マタイ	9・1	8
6日・金	マタイ	9・9	13
7日・土	マタイ	9・14	17